港の欒朱

白秋民謡

6

ARS

白秋民謠の言葉

蕪の二つ三つと、
鰯のひとつかみと、
たつたそれだけで代へてもらひたいのだ、
わたしのこの民謠と。
そして、歌つてもらひたいのだ。

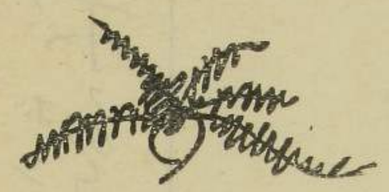
朱ザボンの境

南國調

北原白秋著

小序

「君知るや南の國は」と歌へるミニヨンの歌ならねど、ザボン咲く南の國の、その港々のなつかしさよ。南蠻渡りの紫ザボン、その花白く、その實黄なり。木は高く、つねに夕日の反燒に照りかがやきて、海には昔、八幡(バハン)、黒船の出入り賑やかに、唐、紅毛の情擬、今もなほ此等の古調新曲を成す。



白秋民謡

6

目次

博多古調

博多古調(四章)……三
玄海雜曲(八章)……九
蟹味噌(三章)……三
矢部のやん七(七章)……二六
五島の櫨十(六章)……三一
柳河河童で……三六
筑後柳河(六章)……三八
三豬と沖の端(二章)……四七
柳河時花歌
旅役者……五三
紺屋のおろく……五五
柳河……五七
NOSKAI……六一
かきつばた……六三
AIYANの歌……六四
牡丹……六六
氣まぐれ……六七
道ゆき……六九
目くばせ……七一
六騎……七三

博多古調 十二章

博多帶しめ、
筑前しぼり、
筑前博多の帶しめて、
歩む姿は柳腰。
お月さんが一寸と出て
松のかげ。

博多古調

1

博多、「お出でましたかね。」
商人。
どんたく日和。
「昔や、唐船、
八幡船。」

兵児の青竹、
伊達の帶。

「柳町から可愛い小女郎が出て招く、
ハイ、今晩は。」

2

今日は、「お出でましたかね。」
どんたく、

皆さま御免。

「仁輪加で御溜飲
一寸と下げて、」

明日は商人、
縞の帶。

「酒樽ポンとたたいて浮かしやんせ、
サア、どんだくだ。」

3

博多、「乘り出しまつしよかね。」
出てから、
唐津で月夜、

「おも梶、とり梶、
八幡船。」

平戸、嚴原、

星あかり。

「澳門過ぎれば暹羅國。
ハア、よか凪ね。」

4

灘は、「乘り出しまつしよかね。」
玄海、
平戸は瀨戸よ。

「博多小女郎を
一寸と乗せて。」

船は唐船、
浪まくら。

「ジャガタラ、天竺、なんのその、
ハア、よか凪ね。」

玄海雑曲

1

瀬戸は、「乗り出しまつしよかね。」
早鞆、
迅風で通よや、

「ちらちら燈は
下の闘。」

汐は一汐、
帆は輕るい。

「お月さんも一寸と出て門司の岬、
ハイ、今晩は。」

2

海の、「お出でましたかね。」
中道、

ふつりと絶えて。

「あちらは玄海、
こちや博多。」

波はたかの島、
離れ島。

「お月さんが一寸と出て松のよこ、
ハイ、今晩は。」

3

芥屋の、「お出でましたかね。」
大門の
汐漚なれば、

「戻るにや戻れず、
浮ばれず。」

果てはしら波、

闇の泡。

「お月さんがちらと出て、岩の外、
ハイ、今晩も。」

4

沖の、「お出でましたかね。」
小島か、
裏向き島か。

「紅い櫟を
一寸と投げて。」

小燒、夕燒、
すぐ燒ける。

「燒けるなら燒けなはつても、こんがりと、
サア、また來たね。」

5

岸流、「お出でましたかね。」
島かよ、
十六むさし。

「賭博は好きなり、
酒は飲む。」

つまりや、身のはて、

波のはて。

「お前さんの兩刀づかひにやかなやせぬ。
ハア、こりこりだ。」

6

博多、「お出でまつしよかね。」
しぼりか、
小倉の帶か。

「狐は啼き出す、
雨はふる。」

とても、久留米の
紺がすり。

「おこんさんが一寸と出て萱のかげ。
ハイ、今晩は。」

7

誰を、「お出でましたかね。」
呼ぶやら、
呼子の瀬戸で、
「港は何處じやと
平戸船。」

波に千鳥が
ちりちりと。
「お星さんがチラチラと浪のかげ。
また、今晩も。」

九十、「お出でましたかね。」
九島の

數ほど通よて。

「今宵は百代さ
ただ一目。」

呼べと呼子の
はぐれ鳥。

「お星さんがチラチラと浪の外、
また、明晩も。」

蟹味噌

二十五章

蟹を搗きたうがらし擂り筑紫びと酒のさかなに嚙む
夏は來ぬ
筑紫の三瀦男子が醉ひ泣くと夏はこぞりて蟹搗きつ
ぶす
蟹味噌の辛き蟹味噌嚙みつぶし辛くも生きて忍びつ
るかも

蟹味噌

1

どうせ、泣かすなら、
ピリリとござれ。
酒は地の酒、
蟹の味噌。

2

臼で蟹搗き、
南蠻がらし、
どうせ、蟹味噌、
ぬしや辛い。

3

酒のさかなに

蟹味噌嚙ませ、
泣えてくれんの、
死んでくれ。

矢部のやん七

1

矢部のやん七さんに
何買うてあぎゆか。
紅が手のごひ、
豆しぼり。

2

矢部のやん七さんに
見せたかもんな、
祇園祭に
菱の花。

3

矢部のやん七さんが

華魁がよひ、
すゑは河童の
皿かぶり。

4

矢部のやん七さんよ、
泣こごつごたろ。
高麗鴉に、
明けの鐘。

5

矢部のやん七さんな
馬から來たが、
五島の權十どんな
帆で逃げた。

6

矢部のやん七さんが

嚊への土産、
メカジヤアゲマキ、
蟹の味噌。

7

矢部のやん七さんが
子どもの土産、
ててつぷつぷに
風ぐるま。

五嶋の權十

1

五島の權十どんな
なにば積んで來らした。
ザボンむらさき、
赤鯨。

2

五島の權十どんの
お守りさまは
もとは伴天連
海わたり。

一に御十字架、
二に波羅葦僧よ、
三にマリヤの觀世音。

3

五島の權十どんの
帆は風まかせ、
サンタ・マリヤで
神まかせ。

4

五島の權十どんな

梶とり酒よ、
いつも、とり梶、
左利。

5

五島の權十どんが
島原夜酒、
千々岩、天草、
寢て白む。

6

五島の權十どんな
伊達者でござる。
いつも赤兵兒、
裸船。

註、パライソは天主教で天國のこと。

柳河河童で

自嘲

柳河、河童で、
三池、もぐら、
大牟田雀は
煤だらけ。

菜の花盛りは

よかばつてん、
瀬高狐が
すぐ化がす。

筑後柳河

1

筑後、柳河、
柳に燕、
水にや鴉鳥、
かきつばた。

「鴉鳥の頭に火ん點いた、
潜んだと思つたら、けえ消えた。
よか、よか。」

2

筑後、柳河、
阿蘭陀なまり、
街は朱欒の
花盛り。

「祇園守りは殿の紋、
御紋は十字架の花づくし。
よか、よか。」

3

筑後、柳河、
てれつくてんの囃子、
娘御詠歌に

風流舞。

「菜の花盛りは狐つき、
河童に、菱賣に、櫨紅葉、
よか、よか。」

4

筑後、柳河、
そりばつてんが、くさん、

のうも、めすかんも、
ちいん、よかの。

「ウンテレガンのあん情人ふたごころ、
俺や、そりばつてんが、ひとすぢに。」

註、**そりばつてん**。「然しながら」。阿蘭陀なまり。
くさん。「ネ」である。「あのくさん」は「あのネ」、「あのくさんも」は少し品がよくなる。
のうも。「あのネ」である。
めすかんも。なさいますか。「おいでめすかんも」は「おいでなさいますか」である。いつも語尾には、んもを使ふ。断定の時にはばんも、疑問の時にはかんも。めす、

めせ、めした。いつも語尾に使ふ。
ちいん。「ちつとも」である。「ちいんからん」は「ちつとも借りない」と云ふことである。凡て語尾にはんがつく、極めて音樂的で、鳴物の音で話してゐるやうである。
ウンテレガン。支那語か阿蘭陀語かわからない、長崎風である。愚圖六でも無し、ならず者でもなし、ぐでんぐでんの酔つたんぼでも無し。その中間であらう。いやな奴。輕蔑的に憎しんで云ふ時使ふ。

筑後、沖の端、

水天宮の祭、
潟にや不知火、
六騎舟。

「トンカ・ジョンにチンカ・ジョンに、よかオンゴ、
アゲマキ、ムツゴロ、青メクワジヤ、
よか、よか。」

註、**六騎その他**。この町の漁師はもと平家の落武者六騎の子孫である。それで、漁師を六騎(ロッキュ)と云ふ。この潟は有名な筑紫潟である。貝類は日本で一番珍らしいものがある。アゲマキもさうである。メクワジヤもさうである。ムツゴロは鰐に似た潟に棲む魚で、前世紀の殘物ださうである。トンカ・ジョンは大きい坊つちやん。チンカ・ジョンは小さな坊つちやん。オンゴはお嬢さん。

6

高麗鴉に、蜘蛛統、蝦蟇、
虹、女郎、支那人、緣臺。

「耶馬臺言葉に唐なまり、

阿蘭陀附木でひつつけた。
よか、よか。」

註、高麗鴉。黑と白の羽根のある鴉である。柳河地方だけにゐる鴉であらう。朝鮮から來たと云はれてゐる。
コブナヱ。日本の古語か。
ワクド。琉球ではワクビと云ふ。これも日本の古語らしい。
ヂユウツ。阿蘭陀渡りか。
緣寡。バンクの訛りか、同上。
耶馬臺。筑後山門(ヤマト)は倭女王のゐた處だと云はれてゐる。
陀蘭陀附木。マツチの事を云ふ。

三潴と沖の端

1

俺來家て見ろ、
よかオンゴばかり、
七つ家八つ家で
倉ばかり。

誰が、いやばい、
櫨ん實ばかり、
高麗鴉が
鳴くばかり。

2

俺家來て見ろ、
よか酒ばかり、
鯛の濱燒、

鰡のチリ。

誰が、いやばい、
蟹味噌ばかり、
裏にやメクワジヤの
殼ばかり。

柳河時花歌

十一章

私の郷里柳河は水郷である。さうして靜かな廢市の一つである。……水郷柳河はさながら水に浮いた灰色の柩か。……柳と水、菜の花と麥、菜のかきつばたと鳴鳥、螢、ザボンの花、櫨紅葉。……Gonshanのあの情の深い、流暢な、軟みのある語韻、ああ、あの阿蘭陀訛。

旅役者

けふがわかれか、のうえ、
春もをはりか、のうえ、
旅の、さいさい、窓から
芝居小屋を見れば、

よその畑に、のうえ、
麥の畑に、のうえ、
ひとり、さいさい、からしの
花がちる、しよんがいな、

紺屋のおろく

にくいあん畜生は紺屋のおろく。
猫を擁えて夕日の濱を
知らぬ顏して、しやなしやなと。

にくいあん畜生は筑前しぼり、
華奢な指さき濃靑に染めて、

金の指輪もちらちらと。

にくいあん畜生が薄情な眼つき、
黒の前掛、毛繻子か、セルか、
博多帯しめ、からころと、

にくいあん畜生と、擁えた猫と、
赤い入日にふとつまされて
潟に陥つて死ねばよい。ホンニ、ホンニ……

柳河

もうし、もうし、柳河じや
柳河じや。
銅の鳥居を見やしやんせ。
（馭者は喇叭の音をやめて、
赤い夕日の手をかざす。）

薊の生えた
あの家は、……
あの家は、
舊いむかしの遊女屋。
人も住はぬ遊女屋。

裏の*BANKOにゐる人は、
あれは隣の繼娘。
繼娘。

水に映つたそのかげは、……
そのかげは
母の形見の小手鞠を、
小手鞠を、
赤い毛糸でくくるのじや
涙片手にくくるのじや、

もうし、もうし、旅のひと、
旅のひと。

あれ、あの三味をきかしやんせ。
鴉の浮くのを見やしやんせ。
（馭者は喇叭の音をたてて、
あかい夕日の街に入る。）

夕燒、小燒、
明日天氣になあれ。

＊緣聖、葡萄牙語の轉化か。

NOSKAI

堀のBANKOをかたよせて
なにをおもふぞ、花あやめ
かをるゆふべに、しんなりと
ひとり出て見る、花あやめ。

＊NOSKAI 遊女、柳河語

かきつばた

柳河の
古きながれのかきつばた、
晝は*ONGOの手にかをり、
夜は萎れて、
三味線の
細い吐息に泣きあかす。

（鳩のあたまに火ん點いた、
潜んだと思つたらけえ消えた。）

*良家の娘、柳河語

*AIYANの歌

いぢらしや、
*ちゆうまえんだのゆふぐれに
蜘蛛が疲れて身をかくす、
ほんに薊の紫に
刺が光るぢやないかいな。
（*UNTEREGAN のあん畜生はふたごころ。

わしやひとすじに。）

1、下婢、兒守女、柳河語。
2、私の家の菜園の名。
3、あの畜生？

牡丹

ほんにの、薄情な牡丹がちりかかる。
風もない日に、のう、
紅い牡丹が、のうもし、ちりかかる。
ひらきつくした二人がなかか、
雨もふらいで、のうもし、ちりかかる。

氣まぐれ

逢ひに來たち*の
日の照り雨がふるわいな。
*Odan mo iya, Tinco sa!

しやりむり別れたそのあとで、
未練な牡丹がまたひらく。

Odan mo iya, Tinco sa !

1、ちのは雅言とやなり。來たの、來たんですつて、柳河語。

2、Odan はわたしなり、Tincosa は感嘆詞なり、全體の意味はあら厭だよ、まあ、同上。

道ゆき

鰡と黑鯛と、
黑鯛と
鰡と、のうえ、
肥前山をば、やんさのほい、けさ越えた、ぱいと
こずいずい。

後家と按摩さんと、
按摩さんと、
後家と、のうえ、
蜜柑畑から、やんさのほい、昨夜逃げた、ぱいと
こずいずい。

目くばせ

門つけのみふし語りがいふことに
高麗烏のあのこゑわいな。
晝の日なかに生れた赤子
埋めた和尚が一人あるぞえ。
古寺の高麗烏のいふことに、

みふし語りのあの絃わいな。
今日も今日とでかんしやくもちの
振られ男がそこいらに。

*鄙びて粗末なる一種の琵琶を抱きて卑近なる物語を歌ひながら
ゆく盲目の門つけなり、地方特殊のものにてその歌ひものをみ
ふしと云ふ。

六騎

*御正忌參詣らんかん、
情人が髪結うて待つとるばん。
御正忌參詣らんかん、
寺の夜あけの細道に。

鐘が鳴る鐘が鳴る。
逢うて泣けとの鐘が鳴る。

＊親鸞上人の御正忌なり。

朱欒の港

定價參拾錢

版權所有

大正十一年十一月十五日印刷
大正十一年十一月十八日發行

著作者　北原白秋

發行者　北原鐵雄
東京市京橋區銀座尾張町新地五番地
合資會社アルス代表者

印刷者　山本源太郎
東京市小石川區久堅町四十五番地

發行所　東京市京橋區銀座尾張町　合資會社アルス
電話銀座二一九三番
振替東京二四八八八番

製本金子

白秋民謠

第一輯　空に眞赤な
第二輯　さすらひの唄
第三輯　朝草刈り
第四輯　城ケ島の雨
第五輯　朝立つ虹
第六輯　朱欒の港

◇定價各冊參拾錢◇
◇送料各冊貳錢◇

白秋パンフレット

第一輯　短唱　月光微韻
第二輯　短章　落葉松
第三輯　短章　初冬の星
第四輯　詩集　動き來るもの
第五輯　民謠體短唱　薄陽の旅
第六輯　小唄　雀の頭巾

◇定價各冊參拾錢◇
◇送料各冊貳錢◇

白秋童謡

第一輯　螢こ苺　小杉未醒氏畫
第二輯　夢の小函　前川千帆氏畫
第三輯　こんこん小山　小杉未醒氏畫
第四輯　お祭のころ　木村荘八氏畫
第五輯　お月夜のうた　森田恒友氏畫
第六輯　ねんねのお鳩　木村荘八氏畫

北原白秋氏著　菊版　定價各册參拾五錢
二度刷美本　送料各册二錢